

# 投影描画法によって現れたコンプレックス

— 陰影が語るもの —

府川 昭世

The Complex Appeared through Projective Drawings  
: Something Symbolized by Shadow  
Teruyo Fukawa

## 要約

意識体系の中心的機能として自我を考える分析心理学の立場から、投影描画法によって現れるコンプレックスを概観した。自我の働きを乱すものがコンプレックスである。コンプレックスには中心となる二つの核がある。一つは心的外傷であり、もう一つは普遍的無意識である。投影描画法の一つである樹木画は、無意識的に深い層の自己像が表れるといわれている。樹木画に表現される陰影は、心的外傷とそれに付随する感情を表すとともに、普遍的無意識の元型の一つである影を象徴的に表している。

筆者が出合った小学生・中学生・高校生の樹木画に表現された陰影をコンプレックスの観点から質的に考察する。「健常群」にも陰影のある樹木を描いた描画者は9割いた。「臨床群」の樹木画は、その陰影の濃さと陰影がほどこされる範囲によってコンプレックスの強さを印象づけた。陰影によって象徴される影は、破壊的にも建設的にも働きうることが示された。

## キーワード

投影描画法、コンプレックス、個人的無意識、普遍的無意識、陰影

## 投影描画法とは何か

投影描画法とは、人のパーソナリティを理解するための心理テストの一つである。紙に絵を描いてもらうと、描画者の心にある感情・願望・態度などが絵に表れる。はっきりと自覚しない認めたくない感情や願望も無意識に絵に投影されることがわかってきた。投影の心理的機制は、自分の心にある感情・願望・態度などを自分のものとして受け入れ難い場合に、これらを外界や他者に属するものと認識する自我防衛の心理的機制をいう。発達的には、投影はきわめて早期に発生する機制で、苦痛を与えるものや不快なものを自分の内部から吐き出し排泄することから発している。生命維持の要請を背景として、出生と同時に生理的に働いていたメカニズムが次第に心理的機制としての役割を果たすようになった（馬場, 2002, 小此木・馬場, 2004）。

投影法による人間理解といえば、Rorschach (1921) が発表したロールシャッハ・テストが有名だが、これに先立って19世紀後半から連想語実験などによる投影法に関連した査定法の試みは始まっていた。Galton、Kraepelin、WundtやJungらがそれらに相当する。そして、アメリカ臨床心理学における「投影法によるパーソナリティ査定」の運動は1930年代後半から始まり1940～1950年代が最盛期を迎え、今日に至っている。投影法によるパーソナリティ診断法はロールシャッハ・テストの他に、TAT（絵画統覚検査）やSCT（文章完成法テスト）、P-F スタディ（絵画欲求不満テスト）などがあるが、いずれも言語による反応を分析して解釈を行うのが基本である。

投影描画法は、「○○○を描いて下さい」という教示のもとに描かれた絵から描画者の深層心理を読み取るのだが、描画後の質問は重要でその意味では言語反応もテストの一部に含まれる。投影描画法は心理査定の一つの方法だが、同時に心理療法となる場合がある。テスト創案者のプライオリティを明記するために、

テスト名を年代順に示すと以下のようになる。

ベンダー・ゲシタルト・テスト (Bender, 1938) は、視覚・運動ゲシタルト機能の発達成熟度を調べるとともに、米陸軍臨床心理支部長の Hutt によってパーソナリティの隠された特徴の鑑別診断に役立つことが、多くのデータから明らかになった。1930年代に Wartegg が創案したワルテッグ描画テスト (Avé-Lallemant, 1994a) は、A5判の用紙に描かれた4cm平方の8つの四角の中に、小さな曲線や直線が描かれていて「全ての四角のなかに何か描いてください」の教示のもとに自由に描く。そこには描画者の意識的・無意識的情動や願望が投影される。バウム・テスト (Koch, 1949) は「実のなる木」を書かせて、被験者の人格像をより深層に至るまで把握しようとした。Machover が考案した DAP (Draw-A-Person) は、「一人の人を頭の前から足の先まで描いてください」と教示して、B5判用紙を縦にして男女2人を一枚ずつ自由に描かせて、性格特徴をみる。HTPテスト (House-Tree-Person Test) (Buck, 1966) は、「家・樹・人」を描いてもらうことによって、描画者のパーソナリティや生育してきた環境との相互作用が投影されると Buck は考えた。HTPPテストは Buck の HTPテストの人物画を男女両方を描いてもらう方法で、高橋 (1967, 1992) によって開発され、わが国の臨床現場では高橋の HTPPテストや細木の枠づけ多面的 HTPテストがよく用いられている。動的家族画法は、「家族が何かしているところを描いて下さい」の教示によって、描かれた絵は家族関係の無意識の力動性の理解につながる。樹木画テスト (Bolander, 1977) は、被験者の比較的深層にあって無意識の感情を反映するとともに、今日までの経験や未来への希望と計画を含んだ被験者の生活過程の歴史を表す。星と波テスト (Avé-Lallemant, 1994b) は、1mm幅で15.3cm×10.5cmの枠を描き、その中の空白部分に「海の波の上に星空を描いて下さい」と教示し描画の基本的な3つの要素である形・動き・空間の使い方を検討するとともに描画者の深層心理の理解を試みる。臨床的には、「バウム・テスト、ワルテッグ描画テスト、星と波テスト」をテストバッテリーとして用いられることがある。投影描画法というより構成描画法として「風景構成法」(山中, 1984)があるが、描かれたアイテムに描画者の意識的、無意識的な投影があるのではないかと筆者は考える。

投影描画法のなかでベンダー・ゲシタルト・テストのように、精神発達の一面を測るために結果を数量化し標準化したテストもあるが、多くの投影描画法は解釈の妥当性・信頼性の裏づけとともに結果の数量化については研究の途上にあるといえよう。臨床的に活用するに当たって臨床家は、それぞれの投影描画法によって何が表現され、どのように解釈するか理論的立場を明確にした上で臨床に役立てていかなければならない。本論においては、投影描画法によって現れる深層心理を Jung が唱えたコンプレックスという視点から考察を試みることにする。

## コンプレックスとは何か

河合 (1967) によると、言語連想検査を心の探求に用いることは古くからなされていたが、臨床的に用いたのは Jung が最初である。簡単な単語の連想にひどく時間がかかる事実気づき、それが情動的な要因によるのではないかと考え「言語連想実験」の方法を1906年に確立した。Jung は100語の刺激語を準備し、「いまから刺激語を言いますから、それを聞いて思いつく単語を一つだけ言ってください」と教示し、反応語の記録とともに刺激語の提示から被験者の反応までの時間を計った。100語の検査が終わったあとで、「も

う一度繰り返しますので前と同じことを言ってください」といって再検査する。前と同じときは+、忘れていたときは-、違った言葉を言ったときはそれを記録する。この「言語連想実験」によって次のような障害が起こることがわかった。(1) 反応時間の遅れ、(2) 反応語を思いつけない、(3) 刺激語をそのまま言う、(4) 刺激語を誤解している、(5) 再検査のときの忘却、(6) 同じ反応語が繰り返される、(7) 明らかに奇妙な反応、(8) 観念の固執、などが主な障害で、Jungはこれらをコンプレックス指標と呼んだ。簡単な連想過程においてさえ障害が生じる点に注目して、Jungは意識の制御の及ばぬ心的過程の存在を認めざるをえなかった。例えば連想実験の54番目の刺激語「白い」に普通は「雪」、「黒い」、「ハンカチ」などを連想するが、ある人は最近親しい人の死が心の底に強い感情を伴って存在しており、「白い」→「白布」→「死人の顔」→「喪」→「黒い」までの反応に著しい時間の遅れを生じた。また「死」の観念が固執して、連想検査55番目の「子ども」という刺激語に「死ぬ」と反応してしまう。同じ被験者は52番目の刺激語「別れる」に対して反応が遅れて「死」と答えたり、58番目の刺激語「悲しい」に「別離」とこたえ、さらに再検査では「死」と答えたりした。Jungは、多くの心的内容が何らかの感情によって結ばれていて、これに関連する外的刺激が与えられると、その心的内容の一群がその人の意識の制御をこえて活動する現象が生じることを認め、何らかの感情によって結ばれている心的内容の集まりをコンプレックスと名づけた。

人間は生まれてから成長するにつれ意識作用は次第に明瞭になり複雑になる。しかもその意識作用が一貫した統合性をもつことが大切である。Jungはこの意識体系の中心的機能として自我を考えた。人はみなこの自我の働きによって、外界を認識し判断し対処していく。しかしながら、統合性をもつ自我の働きを乱すものがある。それがコンプレックスである。コンプレックスは一つの共通な感情によってまとまりをもつ。Jungは述べたが、コンプレックスには中心となる核を持つという。一つは「心的外傷」であり、もう一つは個人の無意識の中に内在していて、いまだかつて意識化されたことのない内容すなわち普遍的無意識である(河合, 1967)。

## 心的外傷

典型的な一つの核が「心的外傷」である。たとえば親から虐待された子どもを思い浮かべてみよう。幼い子どもにとって愛着の対象で唯一の頼りは親である。その親から虐待された心的外傷を意識に留めたまま生きていくことは耐え難い。子どもは親が悪いのではなく自分が悪いから叱られたのだと思う。そして叱られたり殴られたりした心的外傷を必然的に無意識(個人的無意識)のなかに抑圧する。心的外傷体験に付随する恐怖・嫌悪・怒りなどの感情も無意識内に抑圧され、コンプレックスは肥大化していく。その後別の心的外傷体験をすると不快な感情が、抑圧されていたコンプレックスに吸収され、コンプレックスはますます強く大きくなる。コンプレックスの力が非常に強くなり自我と主権を交替するようなことが起きるのが二重人格の現象である。やっかいなことにコンプレックスはある程度自律性を持ち、自我の統制に服さないのいろいろな障害を起こすが、強力になったコンプレックスに対処するために自我がとる方法に自我防衛機制があるとJungは考えた。

まず考えられるのは既に述べたように抑圧の機制である。たとえば、幼少期に親から何らかの虐待を受けて成長した子どもが、思春期にいじめを受けたとする。幼少期の心的外傷は抑圧されていたのだが、思春期

にいじめを受けたことで昔の外傷体験がフラッシュバックする。しかしそれを再び抑圧して生活するが、青年期の疎外体験によってコンプレックスは自我の統制を越えて暴走する。

コンプレックスへの第2の対処は同一視の機制である。厳格で残忍で優秀な父親へのコンプレックスに対処するために、子どもは自我のかなりの部分を父親に同一視し、自我はコンプレックスの影響下におかれる。同一視の程度が自我の全面を覆うと、「私は神である」、「帝王である」など個人的なものを超えて普遍的なものになっていく。

コンプレックスへの第3の対処として投影の機制がある。自分の内部にあるコンプレックスを認知することをさげ、無意識のうちにそれを外部の何かに投影して自分のものとは気づかない。

## いまだかつて意識化されなかった内容

コンプレックスのもう一つの典型的な核は、個人のなかにいまだかつて意識化されたことのない無意識である。Freudは無意識内容の起源として個体発生的リビドーを主に考えた。抑圧を除去する特定の操作（自由連想、催眠、薬物）によってリビドーは意識化が可能になり、検閲を通過できるほどに歪曲された形（夢・いい間違い・神経症状など）によって、前意識や意識に仲間入りするとFreudは考えた。すなわちそれらはすべて個人的無意識である。Jungは個人的無意識の内容を認めながらも、個人的無意識の底にいまだかつて意識されたことのない無意識があると考えた。これを普遍的無意識とJungはよび、人類の全てが普遍的にもっている無意識の層を想定した。この普遍的無意識が意識化されるときはある種の類型化したイメージの形をとる。これらの類型化した潜在的なイメージのパターンを元型とJungは名づけた。このような深層の無意識が何故意識化されるのだろうか？それは、深層の無意識が外界の事物に投影されるからではないかとJungは考え、投影される外界の事物を象徴とよんだ。普遍的無意識は象徴をとおして、初めてしかし間接的に意識される（Jung, von Franz, Henderson, Jacobi, & Jaffe, 1964）。元型が直接意識されることはない。象徴のレベルでその存在に気づくが、個人によってはあるときはそれに気づかなかったり、また生涯意識されぬままとどまることもある。

Jungの定義によると、「象徴とは比較的未知の事柄の可能な最良の表現であり、それ以上明確にあるいは特徴的に表しえないもののこと」をいう。既知の事柄を表す代用物である記号とは区別される。汲みつくせぬ意味をはらんでいる限り象徴は生きている。明確に説明しつくされると単なる記号に墮してしまふ。象徴の重要な機能に別々のものに橋をかけ両者を繋ぐこと、結合すること、分裂を癒すことがある。象徴はこうして意識と無意識を、心と身体を、理性と感情を繋ぐことができる。すなわち普遍的無意識を構成する元型イメージは象徴として建設的・肯定的な働きをすることがある。

Jungは、コンプレックスの重要なもう一つの核が普遍的無意識であり、それらは類型化したイメージのパターンである元型として象徴的に現れると述べた。元型には、ペルソナ・影・アニマ・アニムス・太母・自己などがあるが、まず影について考察し、その後描画に現れる影について事例とともに考察を試みる。

## 元型の諸相の一つとしての影

影は、分析心理学では決定的な役割を演ずる概念であるとHendersonは述べている（Jung et al., 1964）。

個人の意識的な心によって投影された影は、人格のなかに隠され抑圧された不愉快な様相を内容としているが、自我の不愉快で破壊的な態度を含んでいるのと全く同じように、普通の本能や創造的衝動のようなよい性質をもっていると Henderson は述べている (Jung et al., 1964)。影はその主体が自分自身について認めることを拒否しているが、それにもかかわらず直接または間接に自分に覆いかぶさることがらで、利己主義、怠惰、だらしのなさ、非現実的空想、策動、企み、不注意、卑怯、異常な金銭欲や所有欲など、すべての小さい罪悪で、自分にはないが他人には明らかに見出せるものをあらわしていると Von Franz は述べている (Jung et al., 1964)。

個人の意識的生活でその影が表れることが少なければ少ないほど影は黒く濃くなっていく。たとえば子どもの頃から大人しくするよう躰けられた子どもは、意識から斥けられた攻撃性が影となる。普遍的無意識の領域においては多くの人々に悪として感じられてきたものだが、現実には起きていることがらについてこれを内的に認知することは実は非常に難しい。ナチスの台頭やユダヤ人迫害を、影の肩代わりと分析心理学では考える。Von Franz (Jung et al., 1964) は、「影は意識的人格より、はるかに集団的な感染にさらされやすい」と述べている。影の存在を劇的に見せてくれるのがイヴ・ホワイト、イヴ・ブラックの事例に示される二重人格である (河合, 1967)。

正体不明の内容が自分自身に属することを認めるには時間が必要であるし、自我の崩壊の危機に直面する恐れがある。個人的影と普遍的影が未分化な状態では影からひたすら逃げることも大切で、時をかせぐうちに自我に受け入れやすく変化してくる。影との対決には死と再生が含まれる。一連の影を、認知→対決→統合の過程として体験できるかは、治療者がクライアントの一連の影をいかに共有できるかにかかっている (河合, 1967)。

## 投影描画法によって現れた陰影

投影描画法のなかでも無意識的に深い層の自己像を表し、抑圧している感情・体験・態度を投影しやすい樹木画に描かれた陰影を、テストの創案者はどのように解釈しているだろうか。

Koch (1949) は、バウム・テストに描かれた幹の陰影を、非行少年群 (151名) と対照群 (高校生135名) で比較して「全面に陰影をつける場合は非行群に有意に多く、陰影を全くつけない場合は対照群に有意に多い」と述べている。さらに Koch によると非行群のバウム・テストが全体として暗い印象を受けるのは、幹ばかりか地平や樹木の背景に陰影をつけるのも非行群に多いためではないかと述べている。

Buck (1966) は陰影が立体効果をあげ、熟練した画家のように写実的な技法として陰影を用いる場合の陰影は「健常」だが、陰影が過度に濃くあるいは不適當なところに用いられるときは「病理のサイン」となるという。

分析心理学の影響をうけている Bolander (1977) は、樹木画を比較的心身の健康な成人のパーソナリティを理解する方法として研究してきた。陰影の考えはバックの考えに基本的に同意するとともに、陰影には3つの意味があると考えた。第1は外界からの影響に対して自我を防御する意味、第2は描画者の恥や不快で苦痛な出来事を隠す意味、第3は描画者の中に隠蔽されている攻撃性の象徴としての意味がある。さらに彼女は樹木画の陰影を、用い方・配置・陰影のある木の部分の3つから考察している。

高橋（1992）は、HTPPテストの家・木・人の描画像内部全体や一部をやや濃く塗った陰影を「他人への過敏な傾向」、黒く塗りつぶした陰影を「不安・強迫的抑うつ気分・退行」と述べている。

Castilla（1994）は濃い陰影を「不安・神経過敏・抑うつ傾向・衝動性・攻撃性」のサインと述べている。Jungは「影は同性の姿で夢や神話に現れる」ということから、深層の自分の姿を投影する樹木画にも元型としての影が、樹木画の陰影として象徴的にあらわれるのではないかと筆者は考える。そこで筆者が臨床場面で出会った小学生・中学生および一般的には健常群といわれる高校生に描いてもらった絵に現れた陰影を、Jungのいうコンプレックス（心的外傷・元型としての影）の観点から考察する。いずれの絵も8年以上前に描いてもらったもので、発表の承諾を得る手立てがないものもあるので、個人を特定できる情報はできる限り削除した。

図1・図2・図3は学力偏差値の高い女子高校の2年生（30名）が描いた樹木画である。悩みを抱えてカウンセリングにやってくる「臨床群」に対して、一般的には「健常群」といわれるグループにも樹木画の陰影に個人差があることがわかる。

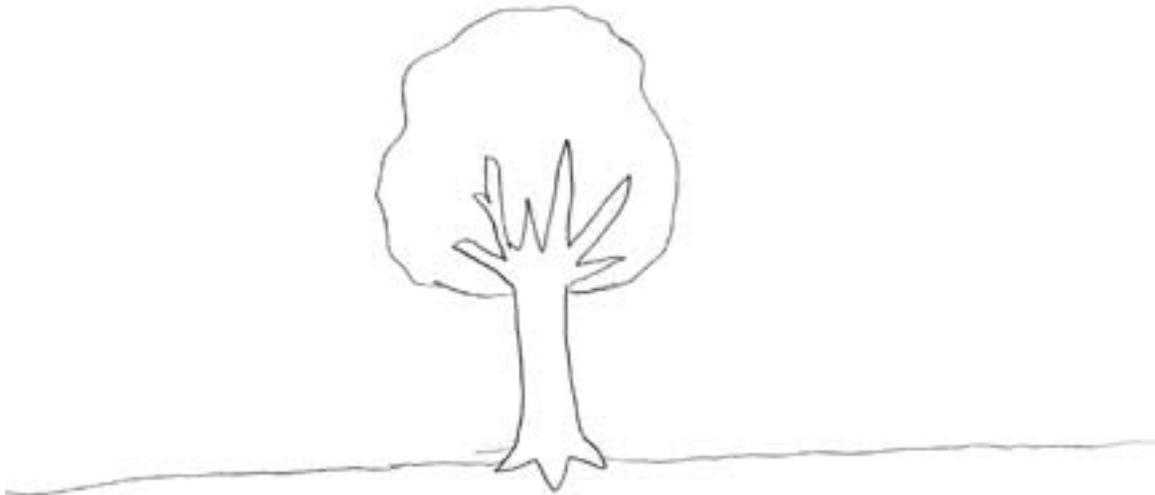


図1 陰影のない樹木画

図1の被験者は陰影のない輪郭だけの樹木画を描き、描画後質問に「不安なし」と答えた。輪郭だけの樹木画をかいた他の2名は描画後質問に「不安あり」と答えた。陰影のない樹木画の描画者にもコンプレックスを感じていない人もいれば、何らかのコンプレックスを感じている人もいるようである。このように陰影のない輪郭だけの樹木画はこのグループの1割に見られたが、残りの9割は何らかの陰影を描いていた。

図2は陰影によって豊かな樹木が描かれているが、描きては「不安はある」と述べている。Bolanderによるとこの絵のような陰影のつけかたは、不安への防衛が十分ではなく、やや逃避的で不安に駆られているという。何らかのコンプレックスを抱えている可能性がある。

図3は、根・幹・枝すべてにかなり濃い陰影がほどこされ、「不安・過敏性・抑うつ傾向」が示されている。Bolanderはこのような陰影の描き方は、何らかの痛ましい経験をかくすのに用いられるが、外部の圧力に耐えられる強さをもつ効果的な盾となると述べている。この描画者は、不安とともに自分の矛盾した性格傾



図2 根、幹、枝、樹冠に陰影のある樹木画



図3 海に面した断崖の樹木画（全てに陰影がある）

向に気づいていた。図3のように樹木全体に陰影のある絵もこのグループの1割の女子高生にみられた。9割の描画者にみられた陰影には、なんらかのコンプレックス（心的外傷、元型としての影）が表現されていると考えられる。



図4 被虐待児の樹木画

図4は、継父の暴力に耐えかねて家出し空き家に忍び込み、コインランドリーからコインを盗み食料を買って生き延びた中学生の樹木画である。「この木は枯れている、ここから腐ってきた」と説明した。心的外傷体験ととも「不安・衝動性・抑うつ傾向・攻撃性」のサインが示されている。同じ描画者に筆者のスクイグルに絵を描いてもらったのが図5である。

描画者の体験・感情・衝動がこれほどまで明瞭に投影されるのだと、スクイグル法（Winnicott, 1996）の凄さを痛感した絵である。この少年は、「明日から少年院に行きます」とセラピストに告げたが、枯れているとはいえ太く逞しい幹と、大きな傷を堂々と描き、このような顛末にいたるプロセスをスクイグルに表現できるとは、この少年は、いつの日か元型としての影と対決し、それらを自我と統合して再生への道を歩き出すのではないかと筆者は考える。

図6は、根・幹・枝・樹冠をバランスよく描いているが、樹木と地面の全てに陰影がありとくに樹冠の陰影は濃い。幼少期から感覚過敏があり、同年齢とうまく遊べない、一人遊びが多いなど発達障害傾向を疑う生育歴がある。そのことに気づかない親は子どもを叱ったり責めたりして、不安と苛立ちに長年悩んできた。中学入学後本児の家庭内暴力がエスカレートしてきた。暴力は家庭外では振るわれない。樹冠の濃い陰影は



図5 図1の描画を書いた生徒のスケイグル



図6 家庭内暴力生徒の樹木画

意識水準の外傷体験を隠したり、自分の傷つきやすさの「覆い」を示すとともに、金銭欲や利己主義など元型としての影を象徴的に表している。しかしこの樹木画はしっかりとした根・太い幹・何本かの閉じられた枝（攻撃的だが）がバランスよく描かれていることから、影を統合することができると建設的な方向に向かう可能性を示唆している。

図7は、登校する朝（とくに月曜日）になると頭痛・吐き気・微熱などのため登校できなくなり、母が仕事を休むと元気になる小学3年生の樹木画である。発達的にこの年齢では描かれるようになる根は断ち切られていて、幹は真っ黒に塗りつぶされている。樹冠には陰影のない閉じた枝が4本描かれ、幹の左右にも腕

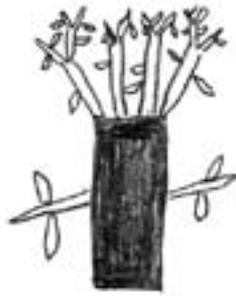


図7 両親の不和に悩む小学三年生の樹木画

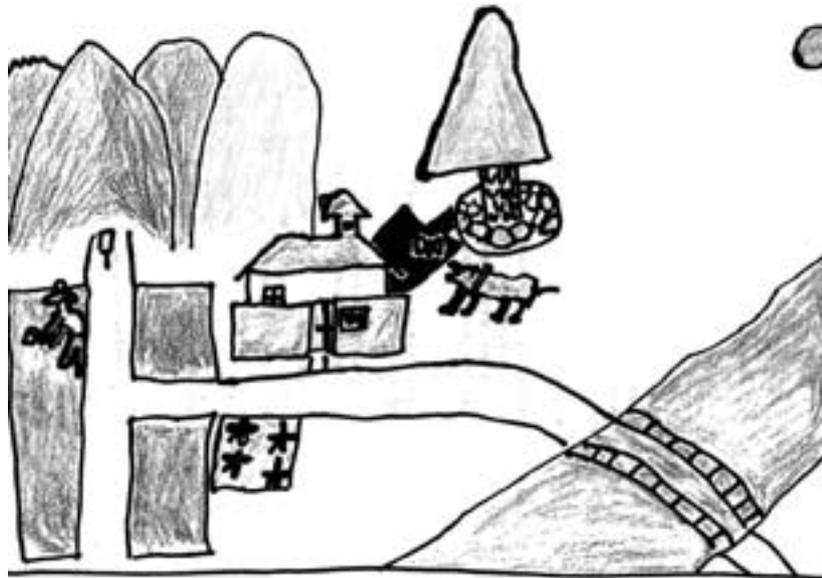


図8 家庭内暴力生徒の樹木画

のように尖った枝がある。そして葉が丁寧に描かれている。この真っ黒に塗りつぶされた幹は何を象徴しているのだろうか？ Bolanderが、「幹が黒いラインで本当に塗りつぶしてあれば、被験者が情緒領域へのすべての接近や影響を強迫的に拒否し、抹消していることを表している。」と述べていることから、只ならぬ心的外傷をうけそれに耐え切れなくなっていることが分かる。背景に両親の不和があるが、母親が必死に子どもを守ることで、こどもは陰影のない枝を伸ばし葉をつけることができた。

図8は、1年前に母親を亡くした小学4年生の風景構成法に描かれた樹木画に注目したい。樹木の影が黒々と地面に描かれている。太陽の位置からすれば、犬や家や人にも影があるのが自然なのだが、なぜか樹木のみ影がくっきりと描かれている。筆者はこれこそ普遍的無意識の元型としての影の象徴ではないかと考える。母親は何者かに殺められていた。容疑者はつかまったものの、子どもは母の死に疑惑をもっていたのではないかと考えられる。個人的影と普遍的影が未分化の状態では、影からひたすら逃げるのが大切と河合(1967)は言ったが、この子どもは1～2か月前から不思議な感じ(誰もいない部屋で視線を感じるとか、ドアが閉まる音)に悩んできた。自我の崩壊の危機に直面していたのではないかと考えられる。一刻も早い

医療が必要であることが明らかとなった。

## まとめ

投影描画法の一つである樹木画に描かれた陰影を、Jungが提唱したコンプレックス（心的外傷、普遍的無意識）の視点から、その基本的概念と臨床的描画の解釈について考察した。

## 引用文献

- Avé-Lallmant, U. 1994a Der Wartegg-Zeichentest in der Lebensberatung. Ernst Reinhardt Verlag. 高辻玲子・杉浦まそみ子・渡辺祥子（訳）2006 ワルテッグ描画テスト 川島書店
- Avé-Lallmant, U. 1994b Der Sterne-Wellen-Test. Ernst Reinhardt Verlag. 小野瑠美子（訳）2003 星と波テスト 川島書店
- 馬場禮子 2002 精神分析事典 岩崎学術出版社, p363. 小此木啓吾・北山修・牛島定信・狩野力八郎・衣笠隆幸・藤山直樹・松本邦裕・妙木浩之 共編
- Bender, L. 1938 A Visual Motor Gestalt Test and its Clinical Use. The American Orthopsychiatric Association. Monograph, Vol.3. 高橋省己（訳）1969 視覚運動ゲシタルト・テストとその臨床的使用 三京房
- Bolander, K. 1977 Assessing Personality Through Tree Drawing. Basic Books Inc. 高橋頼子（訳）1999 樹木画によるパーソナリティの理解 ナカニシヤ出版
- Buck, J. 1966 The House-Tree-Person projective technique. Rev. manual. Western Psychological Services.
- Castilla, D. 1994 Le Test de L'arbre. Relations Humaines et Problèmes Actuels. Masson. 阿部恵一郎（訳）2002 バウム・テスト活用マニュアル —精神症状と問題行動の評価— 金剛出版
- Jung, C. G., von Franz, M.L., Henderson, J.I., Jacobi, J. & Jaffe. A. 1964 Man and His Symbols. Aldus Book Limited. 河合隼雄（監訳）1975 人間と象徴 —無意識の世界（上・下）河出書房新社
- 河合隼雄 1967 ユング心理学入門 培風館
- Koch, K. 1949 Der Baumtest : Der Baumzeichenversuch als psychodignostisches Hilfsmittel. Huber. 英訳, The Tree Test (Der Baumtest). Huber. 1952 林勝造・国吉政一・一谷彊（訳）1970 バウム・テスト —樹木画による人格診断法— 日本文化科学社
- 小此木啓吾・馬場禮子 2004 新版精神力動論 金子書房
- Rorschach, H. 1921 Psychodiagnostik-Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungs Diagnostischen Experiments. [Deutenlassen von Zufallsformen] 9th ed. Huber, H. 1972 鈴木陸夫（訳）1998 新・完訳 精神診断学 付 形態解釈実験の活用 金子書房
- 高橋雅春 1967 描画テスト診断法 —HTPテスト— 文教書院
- 高橋雅春 1992 描画テスト入門 —HTPテスト—（初版15刷）文教書院
- Winnicott, D. W. 1996 Therapeutic Consultations in Child Psychiatry. KARNAC (BOOKS) LTD.

府川：投影描画法によって現れたコンプレックス

山中康裕編集 1984 中井久夫著作集別巻1 風景構成法—シンポジウム— 岩崎学術出版社